

「青梅市地域共生社会推進シンポジウム」実施報告

1 開催日および場所

令和6年9月15日（日）13：00～15：30

場所：市役所2階会議室

2 シンポジウム開催内容

- ・第1部 「地域共生社会の実現に向けて～何からはじめよう、支え合う地域の作り方～」

講師：宮城 孝 法政大学現代福祉学部福祉コミュニティ
学科教授

- ・第2部 パネルディスカッション 地域の取組発表

発表：①住友金属鉱山(株)青梅事業所 木村課長

②特定非営利活動法人和楽倶楽部 相馬理事長

③社会福祉法人青梅市社会福祉協議会 遠藤係長

コメンテーター：①宮城 孝 法政大学教授

②山下 望 地域共生社会推進会議会長

③大勢待市長

3 参加者

98名

4 アンケート回収結果（回収件数：42件）

◆**年齢** （20代：1名、40代：6名、50代：11名、60代：9名、70代：13名、80代：2名）

◆**性別** （女性：15名、男性：26名、回答しない：1名）

◆**第1部について**

・「内容がとてもわかりやすかった」「わかりやすかった」：88%

・「やや難しい」「難しい」：0%、「未回答」：12%

●（主な御意見）

・「各地の具体的な活動事例の紹介があり、理解が深められた」

・「住民の自主的な活動の立ち上げが大切だということがわかった」

- ・「高齢化とコロナ禍後の共生問題が整理できた。」
- ・「地域への愛着を育てるにはどうすべきかの課題を感じた。」
- ・「自治会の課題は義務感だ。義務感からは新しい発想が生まれにくい。郷土に対する愛情や熱意が大切なんだと感じた。」
- ・「地域社会との関係性をもっとアンテナを広げて自分自身が何が出来るかを考えていきたい。」
- ・「住民力を高める。地域への愛着と情熱、仲間がこうした気持ちにはなっていくことが大切だ。」
- ・「第2次ベビーブーム世代のシルバー化による横のつながりを強化したい。」
- ・「先進地での事例をもっと挙げてもらえるとよかった。八王子市の出張所建物内では、はちまるサポートの方が常駐し、とても積極的な活動をしている。青梅よりもずいぶん進んでいる状況にある。」

◆第2部について

- ・「内容がとてもわかりやすかった」「わかりやすかった」：88%
- ・「やや難しい」「難しい」：6%、「未回答」：6%

●（主な御意見）

- ・「もっともっと世間にアピールしても良いのではないかな。また、それを知り、自分も何かできることはないかと皆が考えることで、全体が一歩前に進んでいくと感じた。」
- ・「活動内容を広く市民に紹介して欲しい。知ってる人しか知らない状況だと思う。」「もっと詳しい内容を調べてみようと思った。」
- ・「民間企業が地域へ目を向けていく事は大変有意義な活動だった。」
- ・「楽しいところに集まる活動から地域共生ができていくと感じた。」
- ・「今後の高齢化社会となる日本にとって、より重要で大切な活動となると思った」

- ◆今後、住みよいまちづくりを進める上で、地域住民として取り組んでいきたいテーマ（複数回答可）

- ①世代を超えた交流活動（１５名）
- ②自主活動グループやボランティア活動による新たな活動（１３名）
- ③高齢者や障がいのある人への支援（１２名）
- ④介護者や介護を必要とする人への支援（１０名）
- ⑤健康づくりや生きがい活動（９名）
- ⑥スポーツ・交流・レクリエーション活動（７名）
- ⑦子育ての支援や子どもの見守り（６名）
- ⑦防災や防犯など既存組織の運営に参画（６名）

◆ **シンポジウムのこと、地域共生社会のことなど（自由記載）**

●（主な御意見）

- ・「近隣の問題（独居高齢者等）から始めていきたい。」
- ・「知らないことばかりで自身のアンテナが足りていないと感じた。
地域活動はマンパワー問題があるため、NPO団体や社協による
力が大きい。継続は力だ。」
- ・「自治会をどうやって盛り上げていくか、気付きを与えることがで
きると感じた。」
- ・「今日の学びを今後の地域活動に活かしていきたい。」
- ・「居場所づくりの大切さ。気付いたことから始めたいと思う。」
- ・「共生という観点からもう一度福祉について考えてみたい。」
- ・「とにかく声を掛けよう！！」
- ・「もう少し短時間で終わらせ、パネラーからの発言がもらえるくら
いにするとメリハリが効くと感じた。」
- ・「目指すべき地域共生社会の実感イメージには近くなかった。」
- ・「地域福祉コーディネーターはあり方を強く話されていたが、もっ
とコーディネーター側が地域へ近づいていく雰囲気を持たないと
地域内ではまともらないと思った。」
- ・「時間と話の中身の量が伴っていなかった気がする。もう少し長い
時間配分にした方が良かったのでは？と思った。」